

## 摘要

本研究主旨在於以禮貌策略(politeness strategy)的角度來探討台日大學生針對直呼其名的看法以及習慣之不同，並且考察不同文化背景帶來的影響。目前國內外有關稱呼習慣以及禮貌策略的研究，表示中日語言中的直呼其名可以當作積極禮貌策略(positive politeness strategy)來使用，同時也有不禮貌(impoliteness)的風險。另外，選擇禮貌策略的標準有三個因素；話語雙方的人際距離、權勢關係以及具體言語行為強加程度，並且重視其三因素的比例因文化背景而有不同。但是目前還沒有以其三因素的角度探討直呼其名行為的研究，而且也沒有針對台日兩地區進行的禮貌策略對照研究。是故，本研究透過針對台日大學生問卷結果進行的決策樹分析，以其三因素的角度來探討台日大學生直呼其名行為的一般使用之適當性判斷以及作為禮貌策略的直呼其名之使用狀況與有效性，最後考察文化背景。

研究結果可歸納為以下的十一點。第一，對台日大學生而言，在適當性判斷、使用狀況和有效性的三項目中，“人際距離是否為熟”是影響最大的因素。第二，當人際距離為不熟或不認識時，具體言語行為強加程度的文化差異是第二影響大的因素，台灣大學生的數值都比日本大學生高。第三，當人際距離為外或疏時，權勢關係是第三影響大的因素。第四，當人際距離為熟時，權勢關係是第二影響大的因素。第五，當人際距離為熟且權勢關係為對方比自己強時，具體言語行為強加程度的文化差異是第三影響大的因素，台灣大學生的數值都比日本大學生高。第六，在使用狀況和有效性的兩項目中，當人際距離為熟且權勢關係為對方比自己弱時，具體言語行為強加程度的文化差異是第三影響大的因素，台灣大學生的數值都比日本大學生高。第七，具體言語行為強加程度的場面不同不會影響到三項目的數值。第八，當人際距離為熟且權勢關係為對方跟自己相同，以及在適當性判斷，當人際距離為熟且權勢關係為對方比自己弱時，具體言語行為強加程度的文化差異不會有影響。第九，權勢關係帶來的影響在日本比台灣大。第十，日本的數值往往都低於台灣的。第十一，調查結果的平均數值為有效性 > 使用狀況 > 適當性判斷。

其分析結果的文化背景，可以列出以下四點。第一，關於“人際距離是否為熟”是影響最大的因素，是因為受到重視“內”人際關係的日本社會與強調以個人為中心的社會關係的台灣社會的影響。第二，調查結果的平均數值為有效性 > 使用狀況 > 適當性判斷，是因為判斷禮貌策略的主體為聽話者，而不是說話者。第三，日本大學生比台灣大學生看重權勢關係，是因為在日本社會要考慮幾年的年齡差，在台灣社會則較重視世代。第四，台灣大學生比較容易判斷直呼其名是適當的，而且作為禮貌策略的使用頻率以及有效度也高，是因為中日語言的構造與發想的不同，也就是說中文較重視斷定又正確、有效率的表達，日文則較重視曖昧又安全的表達。

## 目次

第一章	序論	1
1.1	論文の概要	1
1.1.1	問題提起	1
1.1.2	研究目的	1
1.1.3	研究方法	2
1.2	論文の構成	2
第二章	先行研究	3
2.1	呼称の定義	3
2.1.1	日本語における呼称の定義	3
2.1.2	中国語における呼称の定義	3
2.2	呼称の分類	5
2.2.1	日本語における呼称の分類	5
2.2.2	中国語における呼称の分類	6
2.3	呼称の使用状況	7
2.4	呼称の機能	9
2.4.1	日本語における呼称の機能	9
2.4.2	中国語における呼称の機能	9
2.5	ポライトネス・ストラテジーとしての呼称	9
2.5.1	共感的呼称である「名の呼び捨て」	10
2.5.2	ポライトネス・ストラテジーの使用判断	10
2.5.3	ポライトネスの文化差	12
2.5.4	呼称選択要因	13
2.6	先行研究の問題点と本研究の方針	14
第三章	調査概要	14
3.1	調査方法	14
3.1.1	調査協力者	15
3.1.2	調査時期	15
3.1.3	調査の手続き	15
3.2	調査内容	15
3.3	分析方法	16
第四章	結果と考察	17

4.1	調査・分析結果	17
4.1.1	「名の呼び捨て」使用への適切性判断の要因についての決定木分析	17
4.1.2	ポライトネス・ストラテジーとしての使用状況の要因についての決定木分析	19
4.1.3	ポライトネス・ストラテジーとしての有効性の要因についての決定木分析	21
4.1.4	日台における調査結果の比較	24
4.1.5	調査・分析結果のまとめ	25
4.2	文化的要因に関する考察	26
4.2.1	集団主義	26
4.2.2	「先輩／後輩」と「輩分」	28
4.2.3	言語構造・言語発想	28
4.2.4	ポライトネス・ストラテジーを判断する主体としての聞き手	29
第五章	結論	29
5.1	全体の総括	29
5.2	今後の課題	30
付録 I	質問紙（日本語）	32
付録 II	質問紙（中国語）	33
	参考文献	34

## 第一章 序論

### 1.1 論文の概要

#### 1.1.1 問題提起

言語を用いて他者とコミュニケーションをとるとき、私たちは相手や状況に応じて待遇表現<sup>1</sup>を使い分けている。陳（1998）によると、日本語の待遇意識は形式の整った敬語という特定の形態によって表現されるが、中国語の場合は特定の形態ではなく語彙的に表されるものが多い。與水（1977）は、中国語の敬語は相手をどのように呼ぶか、あるいは自分をどのように呼ぶかという呼称の問題に大きな比重が置かれると指摘した。

筆者は18年間日本で暮らした後、台湾に住んで3年になる。日本語で会話をする相手で筆者のことを「(姓ではなく)名の呼び捨て」で呼ぶのは、家族と親しい友人数名程度である。しかし台湾において中国語で会話をする相手だと、顔見知り程度のクラスメイトや後輩からも呼び捨てで呼ばれることがある。当初は無礼さを感じることもあったが、今となっては呼び捨てで呼ばれる方が親しさを感じてプラスの印象を受けるようになった。

このように、「名の呼び捨て」という呼称は日中両言語において共通して用いられているが、その使用実態や使用による感じ方は異なると考えられる。

#### 1.1.2 研究目的

本稿では、数ある呼称の中でも「名の呼び捨て」に着目し、その使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジー<sup>2</sup>としての使用状況と有効性について、日本と台湾の大学生を対象とした調査・考察を行う。具体的には、以下の3点を目的とする。

---

<sup>1</sup> 「待遇表現」は、以下のように定義される。

待遇表現とは、「表現主体」が、ある「表現意図」を、「自分」・「相手」・「話題の人物」相互間の関係、「表現場」の状況・雰囲気、「表現形態」等を考慮し、それらに応じた「表現題材」、「表現内容」、「表現方法」を用いて、表現する言語行為である。（蒲谷・坂本 1991: 26）

<sup>2</sup> コミュニケーションの場面において人が抱く二種類の基本的欲求（①ネガティブ・フェイス：“他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない”、自己決定の欲求 ②ポジティブ・フェイス：“他者に受け入れられたい・よく思われたい”、他者評価の欲求）に配慮することを「ポライトネス」という。ポライトネス・ストラテジーとは、対人関係の調節手段としてのポライトネスが表現・伝達される具体的な手段のことを指す。ポジティブ・フェイスを顧慮するストラテジーは「ポジティブ・ポライトネス」であり、直接的表現と近接化表現による表現の共感性が特徴である。ネガティブ・フェイスを顧慮するストラテジーは「ネガティブ・ポライトネス」であり、遠隔化的表現や間接的表現による表現の敬避性を特徴としている。（Brown & Levinson 1987; 滝浦 2008）

- ① 日本及び台湾の大学生における「名の呼び捨て」使用の適切性判断の現状及びそれに関わる要因について調査し、分析する。
- ② 日本及び台湾の大学生が「名の呼び捨て」をしたとき・されたときの感じ方の現状及びそれに関わる要因について調査し、ポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性の現状について分析する。
- ③ 日本及び台湾の大学生における「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断、ポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性の現状及びその要因の背景にあると考えられる文化的要因について考察する。

五反田（2018）は、「相手のことをどう呼ぶか・相手にどう呼ばれるか」で相手との心的距離が変わってくると指摘している。本研究を通して日本及び台湾の「名の呼び捨て」行為に対する理解を促すことで、日中両言語話者の接触場面<sup>3</sup>においてより適切に相手との心的距離をはかれるようになれば、より円滑なコミュニケーションが可能になり、より良い人間関係を築くことに役立つと考えられる。

### 1.1.3 研究方法

まず、呼称に関する文献調査を行う。日本語と中国語における呼称の定義、分類、使用状況及び機能についてまとめ、両言語の呼称体系の全体観を整理する。さらに、本研究において着目するポライトネス・ストラテジーについてまとめ、ポライトネス・ストラテジーとしての「名の呼び捨て」やその選択要因を整理する。それに基づき、質問紙調査を通じて日台大学生における「名の呼び捨て」の適切性判断や感じ方に関わる要因についてのデータを収集し、分析を行う。最後に、分析結果の背景にある文化的要因を考察する。

## 1.2 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第二章では、先行研究をもとに日本語と中国語における呼称の定義、分類、使用状況及び機能についてまとめ、両言語の呼称体系の全体観を整理する。また、本研究で扱う「名の呼び捨て」について、両言語の呼称体系における共通性を考察する。さらに、先行研究をもとにポライトネス・ストラテジーについてまとめ、「名の呼び捨て」がポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとして使用されることを示し、その使用判断に影響する要素や文化差を整理する。

第三章では、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジー

---

<sup>3</sup> 接触場面とは、目標言語による母語話者と非母語話者間のインターアクション場面のことである。

としての使用状況と有効性という観点から、様々な相手及び場面における「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断や、自分が相手を「呼び捨て」にする場合・相手から「呼び捨て」にされる場合における感じ方について行なう質問紙調査及び分析方法について説明する。

第四章では、質問紙調査の結果に基づき、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性についての分析・考察を行なう。また、その背景にある文化的要因についても考察する。

第五章では、本研究の結論として、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性に関わる要因についてまとめ、総括を行うと同時に、今後の課題と展望について述べる。

## 第二章 先行研究

### 2.1 呼称の定義

日中両言語において、呼称の定義や名称について様々な研究がなされている。

#### 2.1.1 日本語における呼称の定義

鈴木 (1973) は、現代日本語では一人称、二人称の代名詞の使用が避けられ、別のことばで話を進めていこうとする傾向が明瞭であると指摘した上で、人称代名詞・親族名称・地位名称などの「人称語」を一括して、話し手が自分自身に言及することばを「自称詞」、聞き手に言及することばを「対称詞」、対話の中に登場する第三者を「他称詞」と定義した。さらに、対称詞の用法は呼格的用法と代名詞的用法の二種に分けられると述べた。呼格的用法は聞き手に呼びかける場合に、代名詞的用法は会話中に聞き手に言及する場合に用いられる。

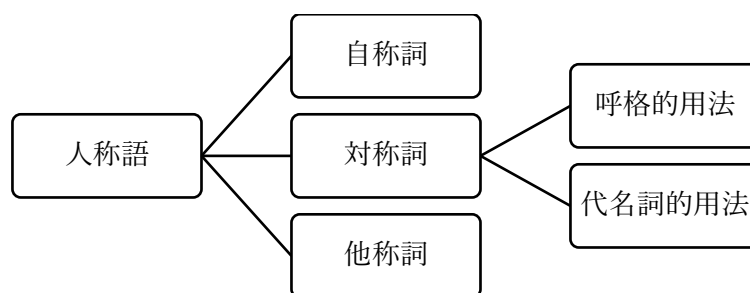


図 1 鈴木 (1973) による人称語の定義

#### 2.1.2 中国語における呼称の定義

日本語の「呼称」は、中国語では「称谓語」または「称呼語」という語によって表されることが多い。

李 (1997) は、現代中国語の呼称体系をまとめた。まず、語彙のうち特定のものを指し示

す語である「指称語」のうち、人を指す語が「称谓語」である。「称谓語」は、言語活動の主体である話し手と聞き手を指す際に用いられる語を「面称語」、話し手と聞き手以外の第三者を指す際に用いられる語を「背称語」と区別できる。さらに「面称語」のうち、話し手を指す語を「自称語」、聞き手を指す語を「対称語」とした。「対称語」は、話し手が聞き手の会話への参加を促したり注意をひきつけたりするためにも用いることができるため、「称呼語」と呼ぶこともできるとしている。

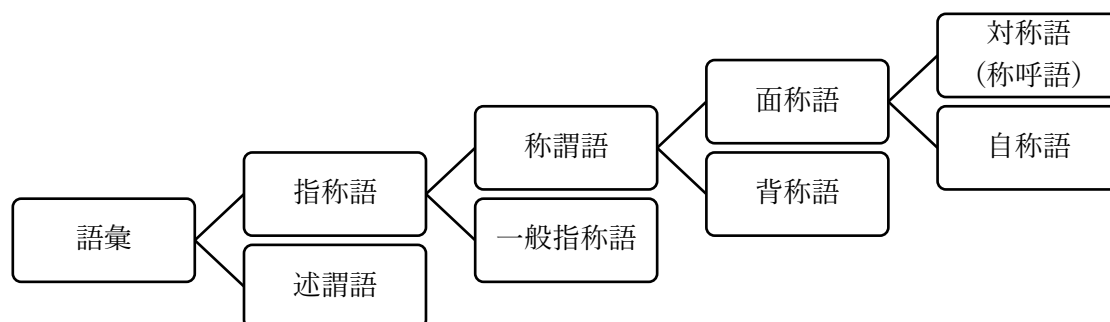


図 2 李 (1997) による現代中国語の呼称体系

上記の李 (1997) による定義に基づけば、「称谓語」は「称呼語」を含んでいるが、近年、「称谓語」と「称呼語」の共通点及び相違点について様々な議論がなされている。馬・常 (1998) は、称谓を「互いの社会的な関係や演じられる社会役割をあらわすために使用される名称」、称呼を「互いがある場で呼ぶために使用される名称」とした。

また、鄭は、称谓語と称呼語について以下のように述べている。

需要説明的是 称谓与称呼有区别也有联系:称谓是属于语言的,而称呼是属于言语的;当称谓词语用于言语交际中的面称时,就成了称呼。

称谓と称呼には区別もあれば繋がりもある。称谓は言語に属し、称呼は言葉に属する。話し手が聞き手に向かって称谓語を用いて呼びかけるとき、称谓は称呼として用いられている。(鄭 2006: 181, 訳は引用者による)

したがって、互いの社会的な関係や演じられる社会役割をあらわす語のうち、聞き手への呼びかけに用いることのできる語は「称谓語であり称呼語でもある(「爸爸」、「老師」など)」といえ、聞き手への呼びかけに用いることのできない語は「称谓語であるが称呼語ではない(「父親」、「教師」など)」といえる。反対に、聞き手への呼びかけに用いることのできる語でも、互いの社会的な関係や演じられる社会役割をあらわす語ではない場合(氏名など)には「称谓語ではないが称呼語である」といえよう。

さらに、王（2008）は、日本語の固有名詞／定記述<sup>4</sup>の対称詞は呼格的用法と代名詞的用法を両方も持っているのに対して、中国語の固有名詞／定記述が対称詞として働く場合、鈴木（1973）の定義における呼格的用法しか持たないと述べ、代名詞的用法として対称詞を用いる際には二人称代名詞が用いられると指摘した。馬・常（1998）や鄭（2006）による中国語の「称呼語」も、呼格的用法のみを想定したものである。

上記、鈴木（1973）における「対称詞」及び李（1997）、馬・常（1998）における「称呼語」の定義を踏まえ、本研究で扱う「呼称」を、日中両言語において共通している「話し手が聞き手に直接呼びかける際に用いられる語」と定義することとする。

## 2.2 呼称の分類

### 2.2.1 日本語における呼称分類

田中・田中（1996）は呼称を「代名詞」、「動詞形」、「名詞による呼び方」という三つの種類に分けた。日本語では、「名詞による呼び方」はさらに 10 種類の小分類を含んでいる。具体には以下表 1 のようにまとめられる。

表 1 田中・田中（1996）による日本語の呼称分類

代名詞	二人称代名詞。「あなた」、「君」	
動詞形	動詞だけで相手を指している場合がある。「おいで」、「来い」、「いらっしやい」	
名詞形	個人名	姓＋名、姓だけ、名だけ
	親族用語名	「お父さん」、「お姉ちゃん」、「おばさん」など
	敬称	個人名の後に「さん」、「さま」、「ちゃん」、「くん」などを付ける
	称号	「先生」、「部長」、「市長」など
	職業名	「電気屋（さん）」、「運転手（さん）」、「駅員（さん）」など、相手の職名そのもので呼ぶ
	愛称	①略称：個人名の一部を略したり変化させたりした呼び名。 ②あだ名：その人の特徴をとらえてつけた呼び名
	「だんな」、「奥さん」	見知らぬ人や店のお客などに対して呼びかけるとき
	「閣下」	「陛下」「殿下」：皇族・大使・大臣・僧正など、身分の高い人に対して用いられる呼び方

<sup>4</sup> ここでの固有名詞とは「名前」「愛称」などを、定記述とは「お父さん」「課長」「先生」といった「親族名称」「職業名称」「地位名称」を指す。

人間関係を表す呼び方	「先輩」や「お隣さん」など
親族名の応用名	有名人の息子のことを、例えば「長島ジュニア」と呼ぶような形

また滝浦 (2008) は、日本語で人を呼ぶのに用いることのできる語種として、親族名称、地位・職業名称、代名詞、名前 (姓・名) の四種類を挙げた。

### 2.2.2 中国語における呼称分類

衛 (1994) は、称呼の形式が多様かつ多变的であることを指摘したうえで、語彙の側面から以下表 2 のように六種に分類した。

表 2 衛 (1994) による中国語の呼称分類

名、姓+名	あだ名や愛称、貶称、尊称、芸名や姓、名の前後に老、小、大、阿などを加えたものを含む
親族名称	親族名称に他の語素を加えたものを含む
身分名称	単独でも姓のあとに加えても用いることができる
職業・職務名称	単独でも姓のあとに加えても用いることができるが、職業・職務により例外がある
その他	「〇〇のお父さん」のように、名詞に他者の名を足した形式や、姓・名と関連せず特定の特徴をもつ人を呼ぶ際のあだ名など
ゼロ呼称	相手を呼ばない。呼び方が不明なときや聞き手への不尊重・話し手の権威を表すときなどに、呼びかけ語などを用いて呼称使用を避ける。

曹 (2005) は、称呼語を親族呼称・社会呼称・姓名呼称の三種に分類し、それらを組み合わせさせた複合的な形式の呼称についても表 3 のようにまとめた。

表 3 曹 (2005) による中国語の呼称分類

親族呼称	直系親族呼称	爺爺、奶奶、媽媽、老公、老婆、兒子など
	傍系親族呼称	伯公、伯婆、伯伯、阿姨、舅舅など
社会呼称	職業・職種・職務呼称	老師、大夫、司機、工程師、總理、部長など
	身分・友人関係呼称	博士、朋友、好漢、壯士、義士など
	親族汎化呼称	①社会的な関係を反映した呼称 同志、師傅、先生、小姐、小朋友、小孩など ②親族呼称を転化した呼称

		大爺、大娘、伯父、伯母、叔叔、阿姨など
姓名呼称	姓+名	郭力、胡双宝、蔡鏡浩、柏麗潔、唐慶華など
	老、小、大+姓	老曹、小王、小逢、大李など
	姓	二文字の姓に限る。
	名	二文字の名に限る。 名が一文字の場合は、恋人間のみで使われる。
	名の一文字の重複	主に子供を呼ぶ際に用いられる。
	小、阿+名一文字	主に同輩や同僚間で用いられる。
	名一文字+儿、子	主に女性に対してのみ用いられる。
複合形式	同位複合呼称	姓名+社会呼称、姓+社会呼称、名+社会呼称、 職業・職種・職務呼称+親族汎化呼称など
	偏正複合呼称	修飾語+親族・社会呼称、年少者の名+親族呼称、 修飾語+名など

田中・田中（1996）、滝浦（2008）と衛（1994）、曹（2005）の分類を比較すると、日本語と中国語の呼称分類は多くが対応していることがわかるが、動詞形による呼称とゼロ呼称の有無という相違点がある。田中・田中（1996）における動詞形による呼称は、相手と呼ばず動詞形を使って相手の注意を引くということであるが、これは衛（1994）におけるゼロ呼称に含まれている。また、日本語でも「あの」「すみません」などの呼びかけ語を用いて相手と呼ばひかけることは一般的であるため、「ゼロ呼称」による呼びかけは、日中両言語の双方において存在しているといえる。

また、本研究で扱う「名の呼び捨て」使用について、中国語では、名での呼び捨ては一般に名が二文字の場合のみに限られている。中華国内政部（2018）によると、台湾の人口において名が一文字であるのは 1.67%であり、曹（2005）中でも三文字以上の名については触れられていないため、台湾においては二文字の名が大多数を占めるといえよう。したがって、本研究においては、中国語名をもつ調査協力者には名が一文字か二文字かをたずね、二者間の調査結果に有意な差があった場合、中国語での「名の呼び捨て」は二文字の名を中心的な研究対象とすることとする。

### 2.3 呼称の使用状況

劉（2016）は、日中両言語における呼称を人称代名詞、親族呼称、社会通称、役職・職業名称、氏名、ゼロ呼称の六種に分類した上で、日本語母語話者及び中国語母語話者における呼称選択要因構図を以下図 3・4 のように作成した。



また、盧は、日中呼称選択の特徴について、以下のように指摘している。

総合的にみれば、日本語呼称も中国語呼称も整然とした社会的ルールに縛られている。ただ、両者を縛るルールが異なっている。日本語の呼称には社会的通念に従って行われる客観的、定型的な特徴が見られるのに対して、中国語の呼称は、相手との関係や相手の身分などに基づいて、個人的な判断で決定する主観的、多様な特徴が見られる。  
(盧 2009: 92)

## 2.4 呼称の機能

### 2.4.1 日本語における呼称の機能

東出は、対称詞が呼びかけとして用いられる用法を「呼びかけ語」とし、呼びかけ語の機能を次のようにまとめた。

まず基本的機能があり、会話管理的機能、対人関係的機能、語用論的機能の三つに大別でき、それぞれが下位機能を持っている。

- ①基本的機能：命名，聞き手であることの同定
  - ②会話管理的機能：注意喚起，発話権奪取，発話権維持，発話権譲渡
  - ③対人関係的機能：感情表出，エチケット，ポライトネス・ストラテジー，社会調整
  - ④語用論的機能：発話行為（非難，批判，褒め，挨拶，懇願等様々）の代替
- これらは別のレベルの機能であり，ある一つの「呼びかけ語」が同時にいくつかの機能を備えていることもある。（東出 2017: 20-21）

### 2.4.2 中国語における呼称の機能

衛（1994）によると、呼称の機能は以下の3点にまとめられるという。

- ①呼びかけ・挨拶機能：相手の注意を喚起したり、会話の相手を指し示したりする。
- ②感情伝達機能：話し手の聞き手に対する態度や感情を表す。
- ③話題転換機能：話題の構造を明確にしたり、話題の転換を聞き手に伝えたりする。

以上から、日中両言語における呼称の機能には共通点が多いことがわかる。本研究においては、1.1.1 問題提起にて触れた日本と台湾における待遇表現の差に対する問題意識を踏まえ、東出（2017）のまとめた「対人関係的機能」に観点に着目したい。つまり、「名の呼び捨て」という呼称の選択が、話し手と聞き手との関係性にどのように影響するのかを研究することとする。

## 2.5 ポライトネス・ストラテジーとしての呼称

### 2.5.1 共感的呼称である「名の呼び捨て」

呼称の選択が話し手と聞き手の関係性に与える影響について、「対人関係的機能」の一例として挙げられているポライトネス・ストラテジーの観点からの考察が可能であろう。

滝浦（2008）は、呼称は遠隔化／近接化という2つの方向性を持ち、個々の呼称詞は状況に応じてどちらかに振り分けられて機能すると指摘した。遠隔化として用いられる呼称は「敬避的呼称」であり、親族名詞や地位・職業名詞での呼称はその“人”を呼んでいるのではなく、その人に付与された“役割”を呼んでいるのだと考えられる。この場合、“呼ぶ”ことで自分と相手が触れてしまうのを避けるために、“なるべく呼ばないようにして呼ぶ”ことが動機付けとなっているのである。<sup>5</sup>一方、近接化として用いられる呼称は「共感的呼称」であり、固有名や限られた人しか知らない愛称、代名詞による呼称は、相手の“人”をじかに呼び、相手の領域に踏み込んでも人間関係は損なわれないことを含んでいる。

Brown & Levinson（1987）は、ポジティブ・ポライトネスには15の、ネガティブ・ポライトネスには10の下位ストラテジーを立てた。そのうち、本研究で対象としている「名の呼び捨て」を含む共感的呼称の使用は、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーのうち第4の「仲間ウチであることを示す標識を用いよ」及び第7の「共通基盤を想定・喚起・主張せよ」に属するといえる。

### 2.5.2 ポライトネス・ストラテジーの使用判断

Brown & Levinson（1987）は、ほとんどすべての言語行為は潜在的なフェイス・リスク（フェイス侵害の可能性）をもつと述べた。フェイスを脅かすような行為はFTA（Face Threatening Act）と呼ばれ、FTAの深刻度は相手との距離（D）、力関係（P）、事柄の負荷度（R）の三要素が加算的に働いて決定されるとして次のように定式化した。

**【FTAの深刻度算出式】**

$$W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

$W_x$  : FTA<sub>x</sub>の重さ

D : 話し手(S)と聞き手(H)の社会的距離

P : 聞き手(H)が話し手(S)に及ぼす力の量

$R_x$  : そのFTA<sub>x</sub>がその文化内でどの程度負担と見なされるか（負荷量）

(Brown & Levinson 1987=2011: 98)

上記FTAの深刻度算出式によって導かれるフェイス・リスクの大小は、ポライトネス・

<sup>5</sup> ただし、親族名詞や地位・職業名詞での呼称であったとしても、「呼ばない（ゼロ呼称）」と比較した場合には、相対的に近接化的な呼称であるといえる。

ストラテジーの使用選択に関与している。ポライトネス・ストラテジーの選択は「その FTA<sub>x</sub>の内容を伝えたいという欲求」「効率よく、あるいは迅速でありたいという欲求」「聞き手のフェイスを何らかの程度にまで保持したいという欲求」という3欲求の相対的な重みを考慮して行われる。コミュニケーションの目的は意思伝達であるという前提に立てば、話し手はフェイス・リスクの大きさに応じて意思伝達の確実性及び効率性とフェイス保持の安全性を天秤にかけ、互いにとって最善となるような均衡点を見いだしてポライトネス・ストラテジーを選択しているのである。ある FTA のもつフェイス・リスクの大きさとストラテジーの関係性は、以下図5のようにまとめられる。

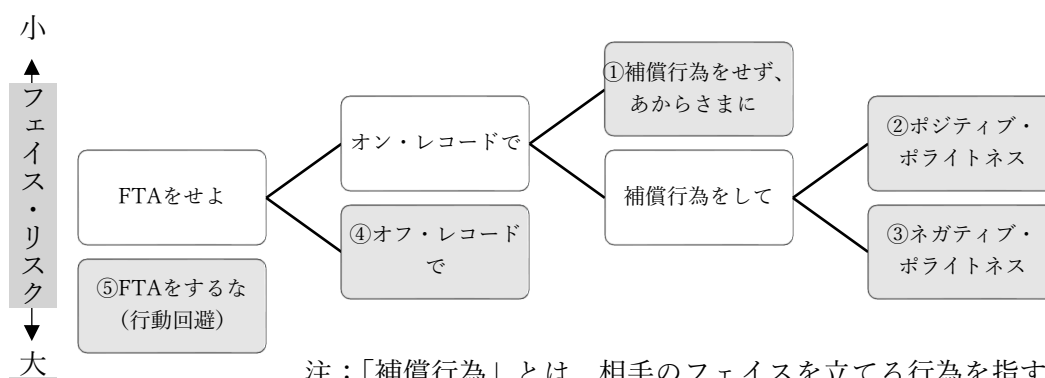


図5 Brown & Levinsonによる FTA を行なうためのストラテジー

5つのストラテジーのうちポジティブ・ポライトネスは、フェイス・リスクが二番目に小さい場合に選択される。つまり、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーが使用される状況とは、フェイス・リスク、すなわち D 値 (社会的距離)・P 値 (力)・R 値 (負荷度) の和が最小ではないが比較的小さい場合だといえる。

また、ポジティブ・ポライトネスは、フェイス・リスクの解消が鮮明でなくとも、より一般的に、話し手の「聞き手にもっと近づきたい」という意志を示すことができる。しかし、聞き手が相応の距離を保っておきたいと感じていた場合にはポジティブ・ポライトネスは歓迎されず、「馴れ馴れしい」「ずうずうしい」といった印象を抱かれる(「インポライトネス」になる)危険性がある。

日本語における「名の呼び捨て」に対する感じ方について、田中 (2009) は性別 (同性・異性) と年齢 (年上・同年輩・年下) 及び恋人、上司というそれぞれの相手に対し、自身が呼び捨てにする場合・された場合の感じ方について、「無礼」「親しみ」「別に」「その他」の選択肢を示して調査した。その結果、女性回答者では、相手が同年輩者または恋人である場合には呼び捨てにする場合・される場合ともに「親しみがわく」ことが多いが、相手が年長者である場合には、相手を呼び捨てにすることには「無礼さ」を感じ、呼び捨てされる場合には「親しみがわく」ことが多い。また相手が年少者である場合、自分が相手を呼び捨てに

する場合には「親しみがわく」ことが多いが、呼び捨てにされると「無礼である」と感じることを示した。

この調査は、「名の呼び捨て」がポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略として用いられる或いは作用する（「親しみ」を感じる）状況とインポライトネスとなる（「無礼」と感じる）状況について、性別及び年齢、話し手と聞き手の関係性から調査したものだといえる。

### 2.5.3 ポライトネスの文化差

滝浦は、「さまざまな言語行為がなされる際に、人間関係の社会的距離（D 値）に敏感な文化、上下の力関係（P 値）に敏感な文化と言った相違は、すくなくとも直感的な印象としてはたしかにあるように思われる。また、事柄の負荷度（R 値）——たとえば、物の貸し借りや頼み事のしやすさといったところがわかりやすい——をどう見るかについても、文化的なスタイルの幅はとても大きい」（滝浦 2008: 119）と述べ、FTA の深刻度算出式の各変数を重視する程度は、文化的なスタイルによって異なることを示唆している。たとえば、人間関係尺度（D 値と P 値）の高低に応じたパターンの中で、カースト制の残るインド的タテ社会の[低 D, 高 P]や、アメリカ西部・現代中国的ヨコ社会の[低 D, 低 P]に対し、日本社会はイギリスと類似の[高 D, 低 P]と位置づけられる。行動尺度（R 値）に関しては、例えば「旅行に行く人に特定のものを買ってきてくれるよう依頼する」という場面について、日本では「あまり気安いものではないし、頼まれたら煩わしく感じる人が多い」一方で、中国や台湾では「頼むことに抵抗を感じないし、頼まれた側も頼りにされている証として誇りに思いなるべく断らない」などといった差異があると指摘している。

林・玉岡・宮岡・金（2010）は、ポライトネス・ストラテジー使用の観点から、日韓における言葉使いの丁寧度に与える要因の影響を考察した。結果として、言葉使いの丁寧度が場面の負荷度（R 値）に影響されることや、日韓ともに社会的距離（D 値）が力関係（P 値）よりも強い影響力をもつこと、韓国人よりも日本人のほうが社会的距離（D 値）をより優先した言葉使いをしていることなどを指摘した。

さらに滝浦は、FTA の深刻度算出式によって同等のフェイス・リスクが計算されたとしても、特定の程度のフェイス・リスクに対してどのストラテジーが優勢であるかは、言語及および文化によって異なることを指摘した。日本社会でネガティブ・ポライトネスが比較的優勢であり、中国社会ではポジティブ・ポライトネスが優勢とされている。同じ場面においても、相手に配慮を示すネガティブ・ポライトネスでフェイス・リスクを解消し、距離を置くような言葉使いを使用する文化と、相手に親しさを示すポジティブ・ポライトネスでフェイス・リスクを解消し、距離を縮めるような言葉使いを使用する文化がある。

井出 (2006) は、英語では‘polite’が‘friendly’にあまり遠くない概念であるのに対し、日本語では「丁寧な」と「親しげな」が異なるカテゴリーに属することを指摘している。アメリカ人にとっては、話し手と聞き手の距離を短くする「名の呼び捨て」の方が、姓に敬称をつけるよりもフレンドリーさを表し、それがポライトでもあるという。その社会において「ポライトネス」がどのような意味を持つかが異なり、どのようにフェイス・リスクを軽減するかに文化差があるのである。

吉見・馬場・周 (1992) は、日本語では (中国語と比べ) 丁寧な呼称を用いることで聞き手とのある程度の心理的距離を保つと述べており、呼称の選択・使用においても比較的ネガティブ・ポライトネスが優勢であるといえるだろう。

#### 2.5.4 呼称選択要因

2.3 における呼称使用状況において、劉 (2016) は呼称の選択要因には、日本語母語話者では話し手と聞き手の関係性、年齢、立場が関係していることを示し、中国語母語話者では話し手と聞き手の関係性、年齢、立場、性別、親疎関係が関係していることを示した。また、吉見・馬場・周は、中日両言語の呼称を対照し、全体的には話し手と聞き手の年齢、社会的地位、役割、丁寧さ、親疎関係などに支配されていることを指摘している。さらに、衛 (1994) は、呼称の選択と変換には主観的な要素 (役割や身分、性別、文化程度、年齢、心理状態など) と客観的な要素 (場面、話しかける対象、社会背景、第三者の存在の有無など) によって決められていると述べた。

上記の呼称選択要因が FTA の深刻度算出式における D 値 (社会的距離)・P 値 (力)・R 値 (負荷度) に与える影響について、以下のように整理できる。

**【呼称選択要因と D 値 (社会的距離)・P 値 (力)・R 値 (負荷度)】**

D 値 (距離) : 話し手と聞き手の親疎関係

P 値 (力) : 話しかける対象と自らの身分・立場の上下の比較

R 値 (負荷度) : ①場面 ②文化

なお、衛 (1994) の挙げた「主観的な要素」については、話しかける対象 (聞き手) との相対的な関係性や場面に集約できるため、ここでは記載を省略する。さらに、「社会背景」が呼称選択・変換に与える影響については、「社会によって D 値 (社会的距離) や P 値 (力) への敏感度や R 値 (負荷度) をどう見るかが異なっているため、特定の呼称選択・使用がポライトネス・ストラテジーとしてどの程度有用であるかに差異がある」こと、またそもそも「ある呼称で他者を呼ぶ」ことに対する負荷度が文化・社会によって異なることを指しているといえる。

## 2.6 先行研究の問題点と本研究の方針

以上の先行研究及び考察から、本研究で対象とする「名の呼び捨て」について、以下のよう整理できる。

- ① 「名の呼び捨て」は、話し手が聞き手に直接呼びかける際に用いられる語（呼称）として、日中両言語でともに用いられている表現である。
- ② 「名の呼び捨て」は、近接化の呼称詞（共感的呼称）として、ポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略として用いることができる一方で、インポライトネスの危険性もはらんでいる。
- ③ ポライトネス・戦略の使用選択は、話し手と聞き手の社会的距離・力関係及び場面や文化といった負荷度によって決定されるが、各要因が使用選択に与える影響の程度及びどのような戦略が優勢かもまた文化によって異なる。

一方で先行研究には、以下3つの問題点が挙げられる。

- ① 日中両言語における呼称の使用状況について、FTAの深刻度算出式におけるD値（距離）・P値（力）・R値（負荷度）の尺度を全て含みながら呼称選択要因を整理したものはない。そのため、本研究で対象としている「名の呼び捨て」の選択要因についても、上記3観点からの考察はなされていない。
- ② 「名の呼び捨て」のポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略としての使用判断や有効性に関して、D値（社会的距離）・P値（力）・R値（負荷度）の観点からの考察はなされていない。
- ③ これまでの中国語における呼称研究では、中国大陸における調査が中心となっており、台湾を調査対象とした研究はほとんどない。台湾と中国大陸では、歴史や文化的背景の違いから言語使用にも差異がみられると考えられる。

これを踏まえ、本研究では「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・戦略としての使用状況と有効性について、日本母語話者と台湾の中国語母語話者、中でも1.1.1の問題提起に立ち返り大学内を対象とした調査・考察を行う。

## 第三章 調査概要

### 3.1 調査方法

本研究では、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・戦略としての使用状況と有効性を調査するため、質問紙調査を行った。

### 3.1.1 調査協力者

調査協力者は、日本語話者計 96 名及び中国語話者計 158 名である。内訳は、日本語話者では男性 43 名、女性 53 名で、平均年齢は 21.2 歳 ( $SD=2.99$ )、普段使用している名前は日本語名 92 名、中国語名 (名前が一文字) 1 名、中国語名 (名前が二文字) 2 名、その他 1 名であった。中国語話者では男性 55 名、女性 101 名、性別無回答者 2 名で、平均年齢は 22.1 歳 ( $SD=1.65$ )、普段使用している名前は日本語名 2 名、中国語名 (名前が一文字) 10 名、中国語名 (名前が二文字) 146 名であった。

### 3.1.2 調査時期

2022 年 3 月 17 日～2022 年 3 月 27 日

### 3.1.3 調査の手続き

個別自計式の質問紙調査によって実施した。調査協力者には Web 上で回答を求め、回答はいずれも無記名で行なわれた。

## 3.2 調査内容

質問項目はまず基本属性 (性別、年齢) 及び普段使用している名前の特徴 (日本語名、中国名で名前が一文字、中国語名で名前が二文字、その他) を尋ねる。次に、人間関係尺度の (D 値, P 値) 異なる相手及び行動尺度 (R 値①, 場面) の異なる場面を想定した上で、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及び自分が相手を「呼び捨て」にする場合・相手から「呼び捨て」にされる場合における感じ方について、行動尺度 (R 値②, 文化) の異なる 2 グループ (日本と台湾の大学生) に尋ねる。なお、各尺度のパターンに関しては 1.1.1 問題提起により、大学内で出会う同世代 (教師と学生など、大きな力関係の差が生じない) 程度の相手の幅にて想定した。

- ・社会的距離 (D 値) 3 尺度：初対面 (外) / 親しくない (疎) / 親しい (親)
- ・力関係 (P 値) 3 尺度：自分より上 / 同程度 / 自分より下
- ・負荷度 (R 値) ① 3 尺度：授業中 (公) / 複数人での雑談 (中) / 一対一での雑談 (私)
- ② 2 尺度：日本 / 台湾

なお、社会的距離 (D 値) における「親しくない / 親しい」の尺度を揃えるため、「親しくない」相手として「顔見知り程度で、日常的には交流がない相手」、「親しい」相手として「よく連絡を取り合っている相手」を想定させることとする。また、力関係 (P 値) における上・中・下では、大学内における人間関係を想定しているため、先輩 / 同級生 / 後輩を想定させることとする。

「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断に関しては、「一般的に、大学生が『名を呼び捨てにする』ことがどの程度適切だと思うか」を、上記の 27(3\*3\*3)パターンの相手及び場面を想定してもらい、「全く適切でない (1点)」「あまり適切でない (2点)」「どちらともいえない (3点)」「ある程度適切である (4点)」「非常に適切である (5点)」の 5段階から選択してもらおう。

次に、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしての使用状況に関しては、「自身が他者を呼ぶとき、『名を呼び捨てにする』ことをどのように感じるか」について、上記の 27(3\*3\*3)パターンの相手及び場面を想定してもらい、「非常に無礼である (1点)」「少し無礼である (2点)」「何も感じない (3点)」「少し親しみを込めている (4点)」「非常に親しみを込めている (5点)」の 5段階から選択してもらおう。

最後に、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしての有効性に関して、「自身が他者から呼ばれるとき、『名を呼び捨てにされる』ことをどう感じるか」について、上記の 27(3\*3\*3)パターンの相手及び場面想定してもらい、「非常に無礼である (1点)」「少し無礼である (2点)」「何も感じない (3点)」「少し親しみを感じる (4点)」「非常に親しみを感じる (5点)」の 5段階から選択してもらおう。

### 3.3 分析方法

まずそれぞれの項目(「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性)について、中国語名をもつ調査協力者において名が一文字であるか二文字であるかによって調査結果に有意な差があるかを分析する。その後、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及び自分が相手を「呼び捨て」にする場合・相手から「呼び捨て」にされる場合における感じ方という 3つの変数を目的変数とし、それぞれに対して社会的距離 (D 値)・力関係 (P 値)・負荷度 (R 値, 場面及び文化) という 4つの説明変数をもたらす影響を決定木分析によって予測する。最後に、日本の大学生と台湾の大学生の調査結果を比較し、文化による全体的な傾向の違いを分析する。データの分析には、IBM SPSS version 28 を用いた。

林・玉岡・宮岡・金は、決定木分析の特徴について以下のように述べている。

決定木分析は、複数の要因群から予測に有益な要因を選択する手法であり、結果は階層をなす樹形図で表される。決定木では各要因がもつ複数の条件のうち、傾向が同じものをグループ化している。樹形図の上部にある要因ほど強い影響力を持ち、上部の要因と相互作用がある場合には、下方に枝を分岐させていく。(林ほか 2010: 105)

## 第四章 結果と考察

### 4.1 分析結果

まず、それぞれの項目について、中国語名をもつ調査協力者において名が一文字であるか二文字であるかによって調査結果に有意な差があるかを検討するため、無作為に抽出したサンプルの  $t$  検定を行なった結果、すべての項目において有意な差があるとはいえなかった。数値は表 4 に示したとおりである。したがって、中国語名で名が一文字である場合と二文字である場合を区別せずに以下の分析を行なった。

表 4 中国語名における名一文字と名二文字の回答有意差の比較

項目	$t$ 値	$df$	$p$ 値
「名の呼び捨て」使用への適切性判断	1.58	397	$p > .05$
自分が「呼び捨て」した場合の感じ方	-1.54	394	$p > .05$
相手に「呼び捨て」された場合の感じ方	-.96	397	$p > .05$

続いて、3つの項目（「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及び自分が相手を「呼び捨て」にする場合・相手から「呼び捨て」にされる場合）について決定木分析を行い、その要因について分析する。

#### 4.1.1 「名の呼び捨て」使用への適切性判断の要因についての決定木分析

「名の呼び捨て」使用への適切性判断に関する調査において、全体の反応数は 6858 で、平均は 2.91 ( $SD=1.23$ )、そのうち日本語話者における反応数は 2592 で、平均は 2.56 ( $SD=1.34$ )、中国語話者における反応数は 4266 で、平均は 3.13 ( $SD=1.10$ ) であった。「名の呼び捨て」使用への適切性判断の要因についての決定木分析の結果は、図 6 の樹形図に示したとおりである。

適切性判断に最も強い影響を与える要因は、「社会的距離 (D 値)」であった [ $F(1, 6856) = 1340.59, p < .001$ ]。図 6 から分かるように、全体を示すノード 0 から「初対面、親しくない (ノード 1)」と「親しい (ノード 2)」に枝が分かれている。「初対面」と「親しくない」が同じグループに分類されているのは、社会的距離 (D 値) が「外・疎」という異なる二者間の適切性に有意差がみられなかったことを示している。つまり、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する「名の呼び捨て使用」は適切だと判断されにくく ( $M = 2.56$ )、「親」の相手に対する場合は適切だと判断されやすい ( $M = 3.61$ ) ことがわかった。

次に、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、適切性判断に二番目に強い影響を与えるのは、「負荷度② (R 値)」である文化であった [ $F(1, 4570) = 406.10, p < .001$ ]。

社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手の場合、日本の大学生は「名の呼び捨て使用」を適切だと判断しにくく ( $M=2.14$ )、台湾の大学生は適切だと判断しやすい ( $M=2.81$ ) ことがわかった。

また、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、負荷度② (R 値, 文化) が日本であるか台湾であるかに関わらず、適切性判断に三番目に強い影響を与えるのは「力関係 (P 値)」であった[負荷度② (R 値, 文化) が「日本」のとき  $F(1, 1708) = 131.20, p < .001$ ; 「台湾」のとき  $F(1, 2860) = 30.96, p < .001$ ]。日本の大学生では、負荷度② (R 値, 文化) が「日本」のノード 3 から「先輩 (ノード 8)」と「同級生, 後輩 (ノード 9)」に、台湾の大学生では、負荷度② (R 値, 文化) が「台湾」のノード 4 から「先輩 (ノード 10)」と「同級生, 後輩 (ノード 11)」に枝が分かれている。日本の大学生・台湾の大学生ともに「同級生」と「後輩」が同じグループに分類されているのは、力関係 (P 値) が「自分と同等・自分より下」という異なる二者間の適切性に有意差がみられなかったことを示している。社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手の場合、適切性は日台ともに力関係 (P 値) が「自分より上」の相手で低くなり («日本」  $M=1.70$ ; 「台湾」  $M=2.66$ )、「自分と同等・自分より下」の相手で高くなる («日本」  $M=2.35$ ; 「台湾」  $M=2.89$ )。日台それぞれの数値の差を比較すると、日本の大学生の差がより大きくなっており («日本」  $0.65$ ; 「台湾」  $0.23$ )、力関係 (P 値) が適切性判断に与える影響は、台湾よりも日本の大学生の方が強いと考えられる。

一方、社会的距離 (D 値) が「親」の相手に対する場合、適切性判断に二番目に強い影響を与えるのは、「力関係 (P 値)」であった[ $F(2, 2283) = 69.87, p < .001$ ]。社会的距離 (D 値) が「親しい」のノード 2 から「先輩 (ノード 5)」、「同級生 (ノード 6)」、「後輩 (ノード 7)」に枝分かれし、それぞれに有意差が見られた。社会的距離 (D 値) が「親」の相手の場合、力関係 (P 値) が「自分より上」の相手 («先輩」) に対する「名の呼び捨て使用」が最も適切だと判断されにくく ( $M=3.27$ )、「自分より下」の相手 («後輩」) が続き ( $M=3.67$ )、「同等」の相手 («同級生」) に対する使用が最も適切だと判断されやすい ( $M=3.89$ ) ことが示された。

力関係 (P 値) が「自分より上」の相手に対する場合、適切性判断に三番目に強い影響を与えるのは「負荷度② (R 値)」である文化であった[ $F(1, 760) = 120.03, p < .001$ ]。社会的距離 (D 値) が「親」であり、かつ力関係 (P 値) が「自分より上」の相手の場合、日本の大学生は「名の呼び捨て使用」を適切だと判断しにくく ( $M=2.74$ )、台湾の大学生は適切だと判断しやすい ( $M=3.59$ ) ことがわかった。なお、力関係 (P 値) が「同等」または「自分より下」の相手に対する場合、「負荷度② (R 値)」である文化は適切性判断には影響を与えない。

また、「負荷度① (R 値)」である場面は、適切性判断には影響を与えない。

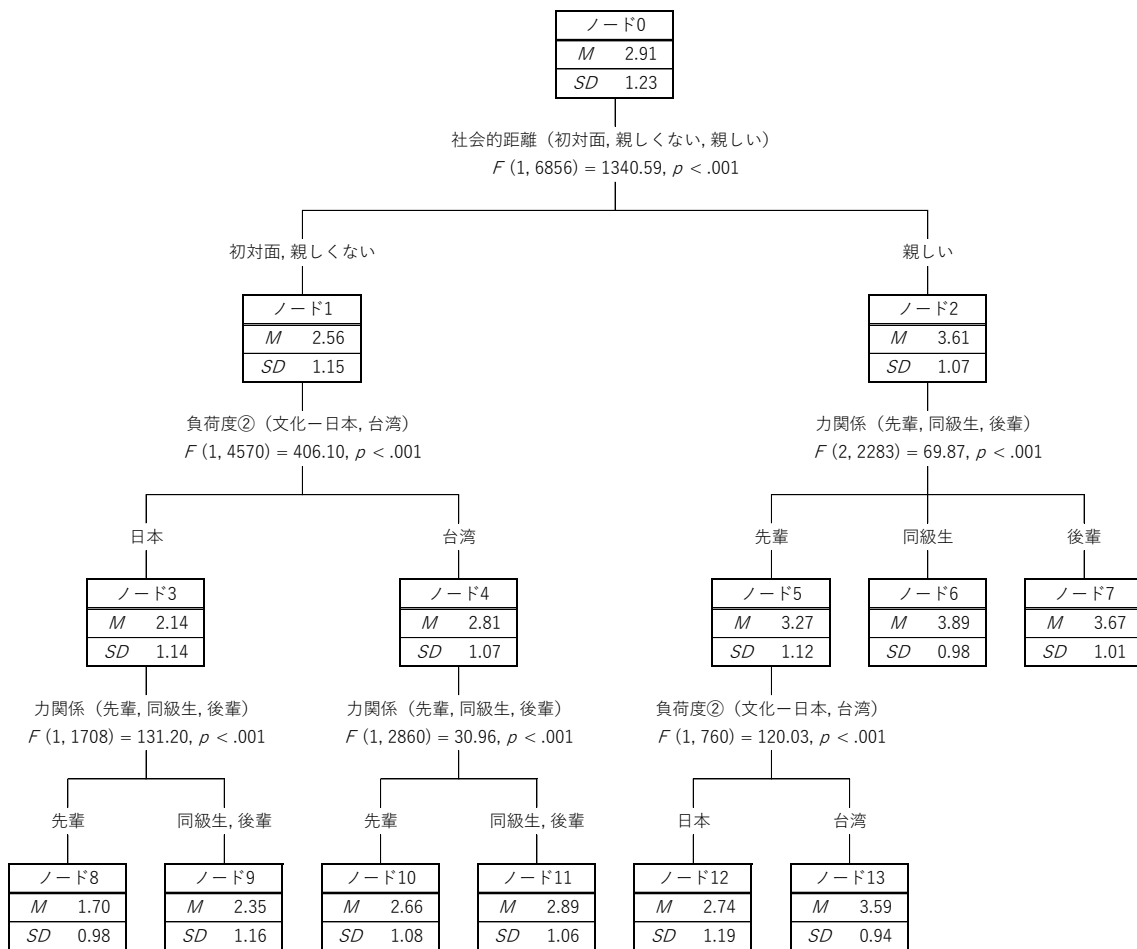


図6 「名の呼び捨て」使用への適切性判断要因についての決定木分析

#### 4.1.2 ポライトネス・ストラテジーとしての使用状況の要因についての決定木分析

自分が相手を「呼び捨て」にする場合の感じ方に関する調査において、全体の反応数は6858で、平均は3.02 ( $SD = 1.20$ )、そのうち日本語話者における反応数は2592で、平均は2.63 ( $SD = 1.30$ )、中国語話者における反応数は4266で、平均は3.25 ( $SD = 1.06$ )であった。自分が「呼び捨て」した場合における感じ方の要因についての決定木分析の結果は、図7の樹形図に示したとおりである。

自分が呼び捨てした場合における感じ方に最も強い影響を与える要因は、「社会的距離(D値)」であった [ $F(1, 6856) = 1153.24, p < .001$ ]。図7から分かるように、全体を示すノード0から「初対面, 親しくない (ノード1)」と「親しい (ノード2)」に枝が分かれている。「初対面」と「親しくない」が同じグループに分類されているのは、社会的距離 (D値) が「外・疎」という異なる二者間において、呼び捨てした場合の感じ方に有意差がみられなかったことを示している。つまり、社会的距離 (D値) が「外・疎」の相手を「呼び捨て」するときには失礼さを感じやすく ( $M = 2.70$ )、「親」の相手に対する場合には親しみを込める

傾向にある ( $M=3.66$ ) ことがわかった。

次に、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、呼び捨てした場合の感じ方に二番目に強い影響を与えるのは、「負荷度② (R 値)」である文化であった [ $F(1, 4570) = 488.22, p < .001$ ]。社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手の場合、日本の大学生が「呼び捨て」するときには失礼さを強く感じ ( $M=2.24$ )、台湾の大学生は相対的に失礼さを感じていない ( $M=2.97$ ) ことがわかった。

また、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、負荷度② (R 値, 文化) が日本であるか台湾であるかに関わらず、呼び捨てした場合の感じ方に三番目に強い影響を与えるのは「力関係 (P 値)」であった [負荷度② (R 値, 文化) が「日本」のとき  $F(1, 1708) = 105.26, p < .001$ ; 「台湾」のとき  $F(1, 2860) = 38.63, p < .001$ ]。日本の大学生では、負荷度② (R 値, 文化) が「日本」のノード 3 から「先輩 (ノード 8)」と「同級生, 後輩 (ノード 9)」に、台湾の大学生では、負荷度② (R 値, 文化) が「台湾」のノード 4 から「先輩 (ノード 10)」と「同級生, 後輩 (ノード 11)」に枝が分かれている。日本の大学生・台湾の大学生ともに「同級生」と「後輩」が同じグループに分類されているのは、力関係 (P 値) が「自分と同等・自分より下」という異なる二者間において、呼び捨てした場合の感じ方に有意差がみられなかったことを示している。社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手の場合、日台ともに力関係 (P 値) が「自分より上」の相手を「呼び捨て」するときには失礼さをより強く感じ (「日本」  $M=1.85$ ; 「台湾」  $M=2.80$ )、「自分と同等・自分より下」の相手に対しては相対的に失礼さを感じていない (「日本」  $M=2.43$ ; 「台湾」  $M=3.06$ ) 傾向がみられる。日台それぞれの数値の差を比較すると、日本の大学生の差がより大きくなっており (「日本」  $0.58$ ; 「台湾」  $0.26$ )、力関係 (P 値) が呼び捨てした場合の感じ方に与える影響は、台湾よりも日本の大学生の方が強いと考えられる。

一方、社会的距離 (D 値) が「親」の相手に対する場合、呼び捨てした場合の感じ方に二番目に強い影響を与えるのは、「力関係 (P 値)」であった [ $F(2, 2283) = 56.58, p < .001$ ]。社会的距離 (D 値) が「親しい」のノード 2 から「先輩 (ノード 5)」、「同級生 (ノード 6)」、「後輩 (ノード 7)」に枝が分かれ、それぞれに有意差が見られた。社会的距離 (D 値) が「親」の相手の場合、力関係 (P 値) が「自分より上」の相手 (「先輩」) を「呼び捨て」するとき親しみを最も込めにくく ( $M=3.35$ )、「自分より下」の相手 (「後輩」) が続き ( $M=3.72$ )、「同等」の相手 (「同級生」) に対して最も強く親しみを込めている ( $M=3.90$ ) ことが示された。

力関係 (P 値) が「自分より上」及び「自分より下」の相手に対する場合、呼び捨てした場合の感じ方に三番目に強い影響を与えるのは「負荷度② (R 値)」である文化であった [力関係 (P 値) が「先輩」のとき  $F(1, 760) = 96.14, p < .001$ ; 「後輩」のとき  $F(1, 760) = 5.63, p < .05$ ]。社会的距離 (D 値) が「親」であり、かつ力関係 (P 値) が「自分より上」ま

たは「自分より下」の相手を「呼び捨て」する場合、日本の大学生の方が親しみを込めにくく（「先輩」 $M=2.87$ ；「後輩」 $M=3.61$ ）、台湾の大学生のほうが親しみを込めている（「先輩」 $M=3.64$ ；「後輩」 $M=3.79$ ）傾向が見られる。「先輩」「後輩」それぞれの場合において、「日本」「台湾」の数値の差を比較すると、「日本」の差がより大きくなっており（「日本」 $0.74$ ；「台湾」 $0.15$ ）、力関係（P 値）が呼び捨てした場合の感じ方に与える影響は、「日本」の方が「台湾」よりも強いと考えられる。なお、力関係（P 値）が「同等」の相手に対する場合、「負荷度②（R 値）」である文化は呼び捨てした場合の感じ方には影響を与えない。

また、「負荷度①（R 値）」である場面は、呼び捨てした場合の感じ方には影響を与えない。

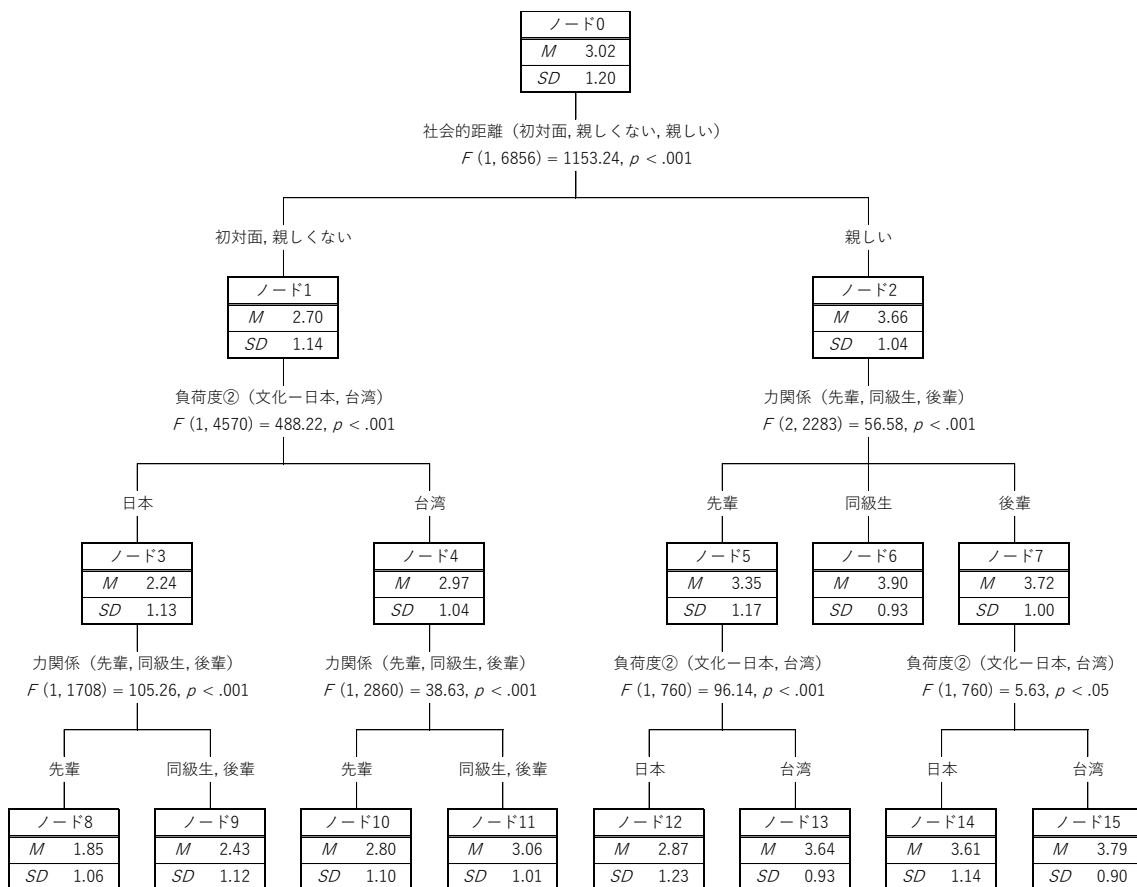


図 6 「呼び捨て」した場合における感じ方の要因についての決定木分析

#### 4.1.3 ポライトネス・ストラテジーとしての有効性の要因についての決定木分析

相手から「呼び捨て」にされた場合における感じ方において、全体の反応数は 6858 で、平均は 3.14 ( $SD=1.15$ )、そのうち日本語話者における反応数は 2592 で、平均は 2.86 ( $SD=1.31$ )、中国語話者における反応数は 4266 で、平均は 3.30 ( $SD=1.01$ ) であった。相手に呼び捨てされた場合における感じ方の要因についての決定木分析の結果は、図 8 の樹形図に示したとおりである。

相手から呼び捨てされた場合における感じ方に最も強い影響を与える要因は、「社会的距離 (D 値)」であった [ $F(1, 6856) = 1097.55, p < .001$ ]。図 8 から分かるように、全体を示すノード 0 から「初対面, 親しくない (ノード 1)」と「親しい (ノード 2)」に枝が分かれている。「初対面」と「親しくない」が同じグループに分類されているのは、社会的距離 (D 値) が「外・疎」という異なる二者間において、呼び捨てされた場合の感じ方に有意差がみられなかったことを示している。つまり、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手を「呼び捨て」するときには失礼さを感じやすく ( $M=2.83$ )、「親」の相手に対する場合には親しみを込める傾向にある ( $M=3.74$ ) ことがわかった。

次に、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、呼び捨てした場合の感じ方に二番目に強い影響を与えるのは、「負荷度② (R 値)」である文化であった [ $F(1, 4570) = 256.17, p < .001$ ]。社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手の場合、日本の大学生が呼び捨てされたときには失礼さを強く感じ ( $M=2.51$ )、台湾の大学生は相対的に失礼さを感じていない ( $M=3.03$ ) ことがわかった。

また、社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対する場合、負荷度② (R 値, 文化) が日本であるか台湾であるかに関わらず、呼び捨てした場合の感じ方に三番目に強い影響を与えるのは「力関係 (P 値)」であった [負荷度② (R 値, 文化) が「日本」のとき  $F(2, 1707) = 37.58, p < .001$ ; 「台湾」のとき  $F(1, 2860) = 50.72, p < .001$ ]。負荷度② (R 値, 文化) が「日本」の場合、ノード 3 から「先輩 (ノード 8)」、「同級生 (ノード 9)」、「後輩 (ノード 10)」に、「台湾」の場合、ノード 4 から「先輩, 同級生 (ノード 11)」と「後輩 (ノード 12)」に枝が分かれている。負荷度② (R 値, 文化) が「台湾」のとき、「先輩」と「同級生」が同じグループに分類されているのは、力関係 (P 値) が「自分より上・自分と同等」という異なる二者間において、呼び捨てされた場合の感じ方に有意差がみられなかったことを示している。社会的距離 (D 値) が「外・疎」の相手に対し、負荷度② (R 値, 文化) が「日本」の場合は、力関係 (P 値) が「自分より下」の相手（「後輩」）から呼び捨てされるときに失礼さを最も感じやすく ( $M=2.17$ )、「自分より上」の相手（「先輩」）が続き ( $M=2.59$ )、「同等」の相手（「同級生」）からの使用では比較的失礼さを感じにくい ( $M=2.75$ ) ことが示された。一方で負荷度② (R 値, 文化) が「台湾」の場合は、力関係 (P 値) が「自分より下」の相手（「後輩」）から呼び捨てされるときに失礼さを感じやすく ( $M=2.84$ )、「同等」

または「自分より上」の相手（「同級生・先輩」）からの使用には親しみを感じやすい（ $M=3.12$ ）傾向が見られる。負荷度②（R 値, 文化）が「日本」と「台湾」のそれぞれの場合において、力関係（P 値）の異なるそれぞれの相手に対する平均の最大値と最低値の差を比較すると、「日本」場合の差がより大きくなっており（「日本」 0.58; 「台湾」 0.28）、力関係（P 値）が呼び捨てした場合の感じ方に与える影響は、負荷度②（R 値, 文化）が「台湾」よりも「日本」のときに強いと考えられる。

一方、社会的距離（D 値）が「親」の相手に対する場合、呼び捨てされた場合の感じ方に二番目に強い影響を与えるのは、「力関係（P 値）」であった [ $F(2,2283) = 21.12, p < .001$ ]。社会的距離（D 値）が「親しい」のノード 2 から「先輩（ノード 5）」、「同級生（ノード 6）」、「後輩（ノード 7）」に枝分かれし、それぞれに有意差が見られた。社会的距離（D 値）が「親」の相手の場合、力関係（P 値）が「自分より下」の相手（「後輩」）から呼び捨てにされるとき親しみを最も感じにくく（ $M=3.56$ ）、「自分より上」の相手（「先輩」）が続き（ $M=3.76$ ）、「同等」の相手（「同級生」）に対して最も強く親しみを感している（ $M=3.89$ ）ことがわかった。

力関係（P 値）が「自分より上」及び「自分より下」の相手に対する場合、呼び捨てした場合の感じ方に三番目に強い影響を与えるのは「負荷度②（R 値）」である文化であった [力関係（P 値）が「先輩」のとき  $F(1,760)=7.74, p < .01$ ; 「後輩」のとき  $F(1,760) = 33.62, p < .001$ ]。社会的距離（D 値）が「親」であり、かつ力関係（P 値）が「自分より上」または「自分より下」の相手を「呼び捨て」する場合、日本の大学生の方が親しみを比較的感じにくく（「先輩」  $M=3.63$ ; 「後輩」  $M=3.29$ ）、台湾の大学生のほうが親しみをより感じやすい（「先輩」  $M=3.84$ ; 「後輩」  $M=3.73$ ）傾向が見られる。「先輩」「後輩」それぞれの場合において、「日本」「台湾」の数値の差を比較すると、「日本」の差がより大きくなっており（「日本」 0.34; 「台湾」 0.11）、力関係（P 値）が呼び捨てした場合の感じ方に与える影響は、「日本」の方が「台湾」よりも強いと考えられる。なお、力関係（P 値）が「同等」の相手に対する場合、「負荷度②（R 値）」である文化は呼び捨てした場合の感じ方には影響を与えない。

また、「負荷度①（R 値）」である場面は、呼び捨てした場合の感じ方には影響を与えない。

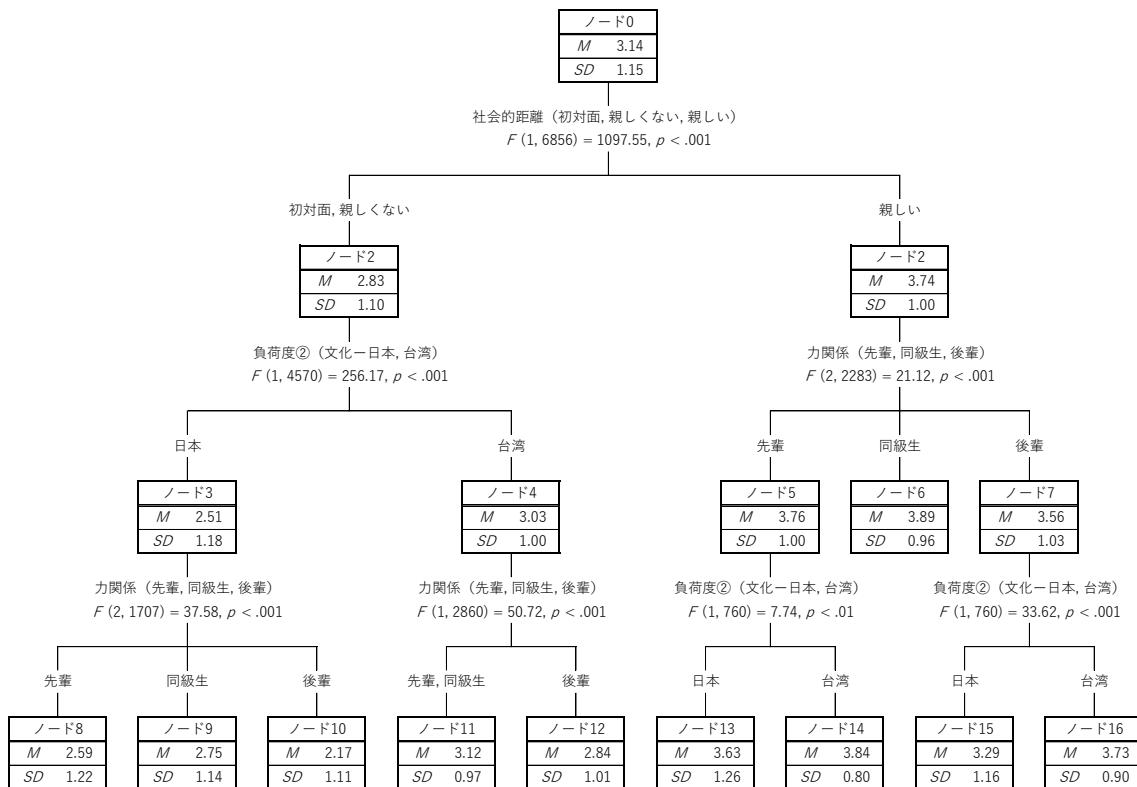


図 7 「呼び捨て」された場合における感じ方の要因についての決定木分析

#### 4.1.4 日台における調査結果の比較

上記 4.1.1~3 においては、文化の違いを「負荷度② (R 値)」という目的変数の 1 つとして扱い決定木分析を行った。本節では、文化による全体的な傾向の違いについて検討するため、日本の大学生と台湾の大学生における適切性判断、呼び捨てした場合の感じ方 (使用状況)、呼び捨てされた場合の感じ方 (有効性) という 3 つの調査項目の平均値の比較を行う。

その結果、3 項目全てにおいて、日本の大学生の平均値は台湾の大学生の平均値を下回っている。数値は表 5 に示した通りである。したがって、社会的距離 (D 値)・力関係 (P 値)・負荷度① (場面, R 値) にかかわらず、日本語話者よりも中国語話者の方が「名の呼び捨て」を適切であると判断する傾向にあり、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしても使用されやすく、また有効であることが分かる。

表 5 日本の大学生と台湾の大学生における回答平均値

項目	平均 (SD)	
	日本 (n = 2592)	台湾 (n = 4266)
「名の呼び捨て」使用への適切性判断	2.56 (1.34)	3.13 (1.10)
自分が「呼び捨て」した場合の感じ方	2.63 (1.30)	3.25 (1.06)
相手に「呼び捨て」された場合の感じ方	2.86 (1.31)	3.30 (1.01)

#### 4.1.5 調査・分析結果のまとめ

本研究の調査・分析結果は、以下の11点にまとめられる。

- ① 適切性判断、呼び捨てした場合の感じ方（使用状況）、呼び捨てされた場合の感じ方（有効性）という3つの調査項目全てにおいて、最も強い影響を与えているのは「社会的距離（D値）」、特に「社会的距離（D値）が『親』であるかどうか」であった。常に「親」と「外・疎」という2グループに分類され、「親」の数値が「外・疎」を上回っていた。
- ② 3項目全てにおいて、社会的距離（D値）が「外・疎」のとき、社会的距離（D値）に次いで二番目に強い影響を与えているのは、「負荷度②（R値）」である文化であった。常に「台湾」の数値が「日本」を上回っていた。
- ③ 3項目全てにおいて、社会的距離（D値）が「外・疎」のとき、負荷度②（R値, 文化）に次いで三番目に強い影響を与えているのは、「力関係（P値）」であった。特に、適切性判断及び呼び捨てした場合の感じ方（使用状況）では「力関係（P値）が『自分より上』であるかどうか」、呼び捨てされた場合の感じ方（有効性）では「力関係（P値）が『自分より下』であるかどうか」が重視されている。  
適切性判断及び呼び捨てした場合の感じ方（使用状況）では、常に「自分より上」と「同等, 自分より下」という2グループに分類され、「同等, 自分より下」の数値が「自分より上」を上回っていた。呼び捨てされた場合の感じ方（有効性）では、負荷度②（R値, 文化）が「日本」のときは「自分より上」「同等」「自分より下」という3グループに分けられ「同等」>「自分より上」>「自分より下」の順に数値が高くなっており、負荷度②（R値, 文化）が「台湾」のときは「自分より上, 同等」と「自分より下」という2グループに分けられ「自分より上, 同等」の数値が「自分より下」を上回っていた。
- ④ 3項目全てにおいて、社会的距離（D値）が「親」のとき、社会的距離（D値）に次いで二番目に強い影響を与えているのは、「力関係（P値）」であった。常に「自分より上」「同等」「自分より下」という3グループに分けられ、適切性判断及び呼び捨てした場合の感じ方（使用状況）では「同等」>「自分より下」>「自分より上」の順に、呼び捨てされた場合の感じ方（有効性）では「同等」>「自分より上」>「自分より下」の順に数値が高くなっている。
- ⑤ 3項目全てにおいて、社会的距離（D値）が「親」かつ力関係（P値）が「自分より上」のとき、力関係（P値）に次いで三番目に強い影響を与えているのは、「負荷度②（R値）」である文化であった。常に「台湾」の数値が「日本」を上回っていた。

- ⑥ 呼び捨てした場合の感じ方（使用状況）及び呼び捨てされた場合の感じ方（有効性）において、社会的距離（D 値）が「親」かつ力関係（P 値）が「自分より下」のとき、力関係（P 値）に次いで三番目に強い影響を与えているのは、「負荷度②（R 値）」である文化であった。常に「台湾」の数値が「日本」を上回っていた。
- ⑦ 3項目全てにおいて、「負荷度①（R 値）」である場面は影響を与えなかった。
- ⑧ 3項目全てにおいて社会的距離（D 値）が「親」かつ力関係（P 値）が「同等」のとき、また適切性判断において社会的距離（D 値）が「親」かつ力関係（P 値）が「自分より下」のとき、「負荷度②（R 値）」である文化は影響を与えなかった。
- ⑨ 3項目全てにおいて、力関係（P 値）が与える影響は、「日本」の方が「台湾」よりも強い。
- ⑩ 「負荷度②（R 値）」である文化が決定木分析の分析結果にあらわれるとき、また「日本」と「台湾」の3項目全体の平均値を比較したとき、常に「日本」の数値は「台湾」の数値を下回っている。したがって、日本の大学生よりも台湾の大学生の方が「名の呼び捨て」を適切であると判断する傾向にあり、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしても使用されやすく、また有効であることが分かる。
- ⑪ 調査結果の平均値は、「呼び捨てされた場合（有効性）」>「呼び捨てした場合（使用状況）」>「適切性判断」となっている。一般的に考えた場合の「名の呼び捨て」の適切性よりも、自らが誰かを「呼び捨て」で呼ぶときのほうが親しみを込めて、また自らが「呼び捨て」で呼ばれたときにはより強い親しみを感じているのである。したがって、「名の呼び捨て」は、一般的に考えられているよりもポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとして多用されており、有効性はさらに高いといえる。

## 4.2 文化的要因に関する考察

本研究の目的は、「名の呼び捨て」使用に対する適切性判断及びポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性の現状とそれに関わる要因について、日本と台湾の大学生を対象とした調査・分析を行うことであった。本節では、4.1 に記した調査・分析結果に対し、その背景にあると考えられる文化的要因についても考察を行なった。

### 4.2.1 集団主義

「社会的距離（D 値）が『親』であるかどうか」が、ポジティブ・ポライトネスに配慮す

る戦略としての「名の呼び捨て」使用選択の要因として最も重視されているのは、日本人と台湾人がどちらも持つ「集団主義」の価値観と関連していると考えられる。日本人と台湾人は両者とも集団主義(collectivism)的な性格を持っており、その程度は日本人よりも台湾人のほうが強い<sup>6</sup>。しかし、この「集団主義」が意味するところは、日本と台湾で異なると考えられる。

日本人には、人間関係を「ウチ・ソト・ヨソ」という3カテゴリーに分けており、その中でも、自らが所属する「ウチ」の集団との人間関係を重視する特徴がある。三宅(1994)は、日本人の社会・文化的特徴として「ウチ・ソト・ヨソ」のカテゴリー分けが重要であることを指摘した。「ウチ」は自己のまわりの家族やごく親しい人々、「ソト」はごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々、ヨソの人間は自己やウチとは関係がないがなにかのきっかけで関わる人々(例:通行人、電車などでまわりにいる人、サービス業の人など)だと定義されている。自己とウチの境界が曖昧である一方、ウチとソト、ソトとヨソの境界ははっきりと線が引かれており、日本人の「丁寧さ」はソト層とウチ層を区別する待遇や言語表現をすることで実現されるのだという。

一方、台湾では、中国社会に特徴的な血縁・地縁関係という広範囲の集団を重視する価値観、また個人を中心に人間関係を捉える価値観が広まっていると考えられる。中嶋(1990)は、中国社会の特色として「血縁(宗族)と地縁(同郷)関係のネットワークの存在」を挙げている。中国人に対して指摘される個人主義・功利主義的性格は、このヨコに広いネットワークの中で小集団をつくらないからこそ発揮されるのである。費(2013)においても、中国の社会構造は無数の血縁・地縁関係が組み合わさったネットワークから成り立っており、それぞれのネットワークは「各個人」を中心に同心円状に広がっていると述べられている。園田(1988)は、現代中国では社会的流動性の増大によって人間関係に占める非血縁主義的要因の割合が増加しており、個人を中心に広がる関係性のネットワークに「友人」が取り込まれていることを指摘している。

このように、日本では自らが属する「ウチ」を重視し、台湾では中国の個人を中心とした関係性のネットワークを重視しているといえよう。その結果、日本の大学生も台湾の大学生も、「名の呼び捨て」を含む共感的呼称の使用は、ポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略のうち「仲間ウチであることを示す標識を用いよ」「共通基盤を想定・喚起・主張せよ」に属する「名の呼び捨て」の使用選択の要因として「社会的距離(D値)が『親』であるかどうか」を最も重要視していると考えられる。

日本社会における「ウチ・ソト・ヨソ」の価値観は、社会的距離(D値)が「ウチ」の場

---

<sup>6</sup> 数値が50より大きければ大きいほど個人主義的、小さければ小さいほど集団主義的であることを示す指標(Individualism Index, IDV)において、日本は46、台湾は17、中国は20である(Hofstede, G. Hofstede, G. J. & Minkov, M. 2010)

合に、全体としてポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略としての「名の呼び捨て」をより使用している台湾の大学生との違い、すなわち負荷度② (R 値, 文化) よりも力関係 (P 値) が重視されることにも影響していると推測できる。

井出 (2006) は、日本人は「社会的にこういうものだとして認められているルール、つまり期待されている基準に従う」という言語使用の特徴をもつと指摘している。ここでのルールとはウチ・ソトの区別であり、それさえ守っていれば言語使用時の「あいまいさ」や「不確かさ」は許されるのだという。さらに王 (2013) においては、日本語で使われている敬語は、ソトに対してウチに関する事柄を述べる際には謙譲語を用いる「相対敬語」であり、韓国語における敬語は「絶対敬語」と比較して、日本社会が内外関係を重視していることと関連すると述べられている。

このように、日本人は「ウチ」の相手に対しては比較的柔軟な言語使用が可能であるため、インポライトネスとなる危険性をもつ「名の呼び捨て」行為を比較的行いやすくなり、全体の数値として高い台湾の大学生の数値に近づいたのだろう。

#### 4.2.2 「先輩／後輩」と「輩分」

社会的距離 (D 値) が「疎・外」の場合に、力関係 (P 値) よりも負荷度② (R 値, 文化) が強い影響力を持つこと、さらに力関係 (P 値) が与える影響が台湾よりも日本で強いことには、日本と台湾における「上下関係」への考え方が異なることが影響していると考えられる。薛 (2005) によると、日本人は組織や集団の中で「先輩／後輩」を、中国人は「輩分」を大事にしているという。「輩分」は「世代」と同義であり、一年～数年の差にも使われる「先輩／後輩」とは全く異質のものである。また、潘 (2016) は、「輩分」は伝統的な台湾社会において人間関係で最も重要だと考えられてきたが、現代では対等な関係性を築くことがより重視されるようになってきたことを指摘している。このように、日本では現代でも「先輩／後輩」という数年の差に配慮する価値観があるが、台湾ではそもそも世代というより大きな差が重視されており、現在はその傾向も弱まってきているのである。

本研究における力関係 (P 値) の差は、「先輩／同級生／後輩」という大学内の関係性を想定していた。これは、日本の大学生にとっては「力関係 (P 値)」として捉えられる違いであるが、台湾の大学生にとっては、全て同世代であるために力関係 (P 値) の差が大きく感じられなかったのであろう。

#### 4.2.3 言語構造・言語発想

日本の大学生よりも台湾の大学生の方が「名の呼び捨て」を適切であると判断する傾向にあり、ポジティブ・ポライトネスに配慮する戦略としても使用されやすく、また有効であることの背景として、日本語と中国語の言語構造及びそれぞれの話者の言語発想が異なることが考えられる。

方・高 (2004) によると、言語構造及び言語発想 (表現主体の発話の心理、言語意識、習

慣と通念を含む社会心理)の違いによって、日本語話者と中国語話者の言語表現や言語習慣が異なるという。日本は長らく同一民族・同一文化・同一言語の国であり、共通の社会ルールがあった。そのため、日本人の意識には自他の間の対立がない。その結果、第一には言わなくても分かることは省略する、あるいは婉曲的に表現することが相手への敬意の表明と考えられてきた。第二に、自分の意見や事実の正誤よりも自他の感情や人間関係を重視し、明快な断定表現を避けるようになった。一方で中国は多民族の国であり、物事を詳細に説明明かさないと相手に分かってもらえない場合も多かった。また、中国語の文構造では主語が不可欠である。そのため、直接的・断定的な表現が好まれ、自分の意図を理解させるために筋道立ててはっきり説明する習慣が生まれた。

ポライトネス・ストラテジーの選択時には、意思伝達の確実性及び効率性とフェイス保持の安全性が天秤にかけられる。日本語話者では「フェイス保持の安全性」が、中国語話者では「意思伝達の確実性及び効率性」が比較的重視されていることが一因となり、日本ではネガティブ・ポライトネスが優勢、台湾ではポジティブ・ポライトネスが優勢となっているのではないだろうか。さらに、「名の呼び捨て」は相手の“人”を直に呼ぶ呼び方である。そのため、省略や婉曲表現を好み断定表現を嫌う日本語話者にとってはインポライトネスになりやすい一方で、断定表現を好む中国語話者にとってはポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーになりやすいと推測される。

#### 4.2.4 ポライトネス・ストラテジーを判断する主体としての聞き手

『名の呼び捨て』は、一般的に考えられているよりもポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとして多用されており、有効性はさらに高いことには、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーを判断する主体が聞き手であることが影響していると考えられる。滝浦(2011)は、「じゃないですか」という共感を求める表現が、状況によって礼(ポライトネス)にも失礼(インポライトネス)にもなり得ることを挙げ、「話し手は共感に訴えたつもりでも、聞き手がそれを心地よい仲間の言葉と受け取るか不当な領域侵犯と受け取るかは、究極的には結果でしかわからない」と述べている。「名の呼び捨て」に関しても、それがポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとなるかどうかを判断する主体は聞き手側であるため、自らが聞き手となる「呼び捨てされた場合(有効性)」に最も親しみを感じやすく、続いて自らが話し手として聞き手を想定できる「呼び捨てした場合(使用状況)」に親しみを感じ、一般的な場合を想定する「適切性判断」では親しみを感じにくいといえるだろう。

## 第五章 結論

### 5.1 全体の総括

本研究では、日台の大学生への質問紙調査を通じ、「名の呼び捨て」使用に対する適切性

判断及びポライトネス・ストラテジーとしての使用状況と有効性の現状とそれに関わる要因について調査・分析を行った。また、それに対し、背景にあると考えられる文化的要因についても考察を行なった。以下に、本研究によって明らかになった、日台大学生の「呼び捨て行為」に関する共通点と相違点を要約する。

共通点は2点挙げられる。

第一に、「社会的距離 (D 値) が『親』であるかどうか」が、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしての「名の呼び捨て」使用選択の要因として最も重視されている。これには、「ウチ」の人間関係を重視するという日本社会の特徴と、個人を中心とした関係性のネットワークを重視する台湾社会の特徴が影響していると考えられる。

第二に、『名の呼び捨て』は、一般的に考えられているよりもポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとして多用されており、有効性はさらに高いことが分かった。これは、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーを判断する主体が聞き手であることが影響していると考えられる。

続いて相違点は以下の2点である。

第一に、日本の大学生は台湾の大学生と比べ「力関係 (P 値)」の違いをより重視する傾向が見られた。これは、日本では先輩・後輩という数年の差も配慮すべき「力関係 (P 値)」の違いであると捉えている一方で、台湾では年齢がいくつかわ離れていても同世代であれば「力関係 (P 値)」は変化しないと考えられているからであろう。

第二に、日本の大学生よりも台湾の大学生の方が「名の呼び捨て」を適切であると判断する傾向にあり、ポジティブ・ポライトネスに配慮するストラテジーとしても使用されやすく、また有効である。この背景には、日本語は曖昧さと「フェイス保持の安全性」を好み、中国語では断定的表現と「意思伝達の確実性及び効率性」が好まれるという、両言語における言語構造及び話者の言語発想が異なることが考えられる。

## 5.2 今後の課題

5.1 における結論を踏まえ、今後の課題については以下のように考えられる。

第一に、本研究にて行った質問紙調査において、「力関係 (P 値)」尺度の設定が台湾社会における価値観を十分に反映しておらず、また「負荷度① (R 値, 場面)」の設定も限られていた点である。「先輩・同級生・後輩」という学校内かつ年齢差の比較的小さい相手だけではなく、親世代・祖父母世代といった世代が異なる相手、または職場の上司と同僚など年齢ではなく立場の異なる相手に対して「力関係 (P 値)」が「名の呼び捨て」使用に与える影響に関しても研究の余地がある。さらに、「負荷度① (R 値, 場面)」に関しては、学校内だけではなくより広い場面の設定を行ったり、質問紙調査だけでなく自然会話データも研究対象に含めたりと、より広く研究を行う必要がある。

第二に、研究対象を日本の大学生と（中国ではなく）「台湾」の大学生に設定したにもかかわらず、文化的要因としては中国社会及び中国語の特徴からの考察が大部分を占めている点が挙げられる。現代中国社会と現代台湾社会が持つ異なる価値観を配慮し、追加調査等を行いながら、台湾人の生活習慣や価値観により基づいた検討が必要である。

## 付録 I 質問紙（日本語）

問 1 性別

1. 男性 2. 女性 3. その他 4. 無回答

問 2 年齢

\_\_\_歳

問 3 普段使用している名前

1. 日本語名 2. 中国語名（姓＋一文字の名前、例：李華）  
3. 中国語名（姓＋二文字の名前、例：王大明） 4. その他

問 4 一般的に、大学生が以下の場面において他者を呼ぶとき、「下の名前を呼び捨てにする」ことはどの程度適切だと思いますか。それぞれの場面と相手について、当てはまるもの【「(1) 全く適切でない」「(2) あまり適切でない」「(3) どちらともいえない」「(4) ある程度適切である」「(5) 非常に適切である】を選択してください。  
なお、「親しくない」相手は「顔見知り程度で、日常的には交流がない相手」、「親しい」相手は「よく連絡を取り合っている相手」を想定してください。

問 5 あなたは、自身が以下の場面において他者を呼ぶとき、「下の名前を呼び捨てにする」ことに対して、どのように感じますか。それぞれの場面と相手について、当てはまるもの【「(1) 非常に無礼である」「(2) 少し無礼である」「(3) 何も感じない」「(4) 少し親しみを込めている」「(5) 非常に親しみを込めている】を選択してください。  
なお、「親しくない」相手は「顔見知り程度で、日常的には交流がない相手」、「親しい」相手は「よく連絡を取り合っている相手」を想定してください。

問 6 あなたは、自身が以下の場面において他者から呼ばれるとき、「下の名前を呼び捨てにされる」ことに対して、どのように感じますか。それぞれの場面と相手について、当てはまるもの【「(1) 非常に無礼である」「(2) 少し無礼である」「(3) 何も感じない」「(4) 少し親しみを感ずる」「(5) 非常に親しみを感ずる】を選択してください。  
なお、「親しくない」相手は「顔見知り程度で、日常的には交流がない相手」、「親しい」相手は「よく連絡を取り合っている相手」を想定してください。

## 付録Ⅱ 質問紙（中国語）

問1 性別

1. 男性 2. 女性 3. 非二元性別 4. 不願意回答

問2 年齡

\_\_\_歲

問3 普段使用している名前

1. 日文 2. 中文/單名（如 李華） 3. 中文/複名（如 王大明） 4. 其他

問4 您認為一般大學生在以下的情況稱呼別人時，直接叫對方的名字(如全名叫做「王大明」以「大明」稱呼)，是否適當？對應每個情況以及與對方的關係，請依您的觀看，選擇最適當的答案填寫。(選項：「(1)非常不適當」「(2)不適當」「(3)普通」「(4)適當」「(5)非常適當」)

請注意：關係不熟的人是指「互相認識，但平常不會交流的人」，關係熟的人是指「常常有交流的人」。

問5 您在以下的情況稱呼別人時，直接叫對方的名字(如全名叫做「王大明」，以「大明」稱呼)，感覺如何呢？對應每個情況以及與對方的關係，請依您的觀看，選擇最適當的答案填寫。(選項：「(1)非常無禮」「(2)無禮」「(3)沒有感覺」「(4)親切」「(5)非常親切」)

請注意：關係不熟的人是指「互相認識，但平常不會交流的人」，關係熟的人是指「常常有交流的人」。

問6 您在以下的情況稱被別人稱呼時，對方直接叫您的名字(如全名叫做「王大明」，以「大明」稱呼)，感覺如何呢？對應每個情況以及與對方的關係，請依您的觀看，選擇最適當的答案填寫。(選項：「(1)非常無禮」「(2)無禮」「(3)沒有感覺」「(4)親切」「(5)非常親切」)

請注意：關係不熟的人是指「互相認識，但平常不會交流的人」，關係熟的人是指「常常有交流的人」。

## 参考文献

- Brown, P & Levinson, S. C. (1987). "Politeness: Some Universals in Language Usage". Cambridge University Press. 田中典子ほか訳(2011). ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象. 研究社.
- 曹炜(2005). 現代漢語中的称谓語和称呼語. 江蘇大学学报(社会科学版), 7(2), 62-29.
- 陳露(1998). 親族語彙に見られる待遇意識. 内間直仁編. 言葉を通してみた本土・沖縄・中国の文化: 代名詞と親族語彙. 千葉大学大学院社会文化科学研究科, 97-114.
- 方懋・高騰飛(2004). 中国人と日本人における言語表現の違い. 新潟産業大学人文学部紀要, 16, 151-161.
- 費孝通(2013). 郷土中国. 北京大学出版社.
- Hofstede, G. Hofstede, G. J. & Minkov, M. (2010). Cultures and Organizations: Software of the Mind, Third Edition. McGraw Hill.
- 東出朋(2017). 日本語の呼びかけ語の語用論的機能とポライトネス: 日露対照研究を通して. 九州大学大学院地球社会統合科学府博士論文.
- 井出祥子(2006). わきまへの語用論. 大修館書店.
- 五百田達成(2018). あのひととの距離が意外と縮まる うまい呼び方. サンマーク出版.
- 蒲谷宏・坂本恵(1991). 待遇表現教育の構想. 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, 3, 23-44.
- 與水優(1977). 中国における敬語. 岩波講座日本語, 4, 271-300. 岩波書店.
- 李明洁(1997). 現代漢語称谓系統的分類標準与功能分析. 華東師範大学学报: 哲学社会科学版, 5, 92-96.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞(2010). 丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析. 日本文化學報, 47, 101-116.
- 劉寧(2016). 日中両言語における呼称表現についての対照研究. 東北大学大学院文学研究科博士論文.
- 盧万才(2009). 日本語と中国語の呼称の待遇的機能, ポリグロシア, 17, 85-94. 立命館アジア太平洋研究センター.
- 馬宏基・常慶豊(1998). 称谓語. 新華出版社.
- 三宅和子(1994). 日本人の言語行動パターン: ウチ・ソト・ヨソ意識. 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 9, 29-39. 筑波大学留学生センター.
- 中嶋嶺雄(1990). 日本人と中国人ここが大違い. ネスコ.
- 潘子婷(2016). 三明治世代的代間關係: 宜蘭媳婦的孝道與實踐. 天主教輔仁大學社會學系學士論文.
- 園田茂人(1988). 中国的<關係主義>に関する基礎的考察. ソシオロギス, 12, 54-67. ソシオロギス編集委員会.

- 鈴木孝夫(1973). ことばと文化. 岩波書店.
- 滝浦真人(2008). ポライトネス入門. 研究社.
- 滝浦真人(2011). 対人コミュニケーションから見る日本語の将来 —“敬”か“親”か—. 学術の動向, 16(5), 100-103.
- 田中春美・田中幸子(1996). 社会言語学への招待. ミネルヴァ書房.
- 田中孝志(2009). 大学生の呼びかけ語の研究. 西南大学 人間科学論集, 4(2), 19-35.
- 衛志強(1994). 称呼的類型及其語用特点. 世界漢語教学, 10-15.
- 王冰菁(2008). 会話文における対称詞の使用についての日中対照考察. 千葉大学人文社会科学 科学研究, 16, 223-239. 千葉大学大学院人文社会科学 研究科.
- 王少鋒(2013). 敬語による国民性と対人コミュニケーションの違い—日・韓・中三国を中心に—. 大阪電気通信大学研究論集 人間科学編, 21, 21-32.
- 母育新(2002). ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較—日本語教育の視点からの考察—. 麗澤学際ジャーナル, 10(1), 75-85.
- 薛鳴(2005). 親族名称と呼称から見る人間関係 日本語と中国語の比較. 井出祥子・平賀正子編. 異文化とコミュニケーション. 170-195. ひつじ書房.
- 吉見孝夫・馬場俊臣・周蕊(1992). 中日両言語の呼称の比較：複雑さと使い分け. 北海道教育大学紀要 第一部 A 人文科学編, 43(1), 33-42. 北海道教育大学
- 中華民国内政部(2018). 全国姓名統計分析.  
<https://www.ris.gov.tw/documents/data/5/2/107namestat.pdf> (最終アクセス日：2022年2月9日)